

NPO 法人 森林再生支援センターニュース

特定非営利活動法人 森林再生支援センター理事長 村田 源
〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5 TEL/FAX 075-211-4145
URL: <http://www.crrn.net> E-mail: info@crrn.net

団栗(どんぐり)の秘密

森林再生支援センター
理事長 村田 源

ブナ科の植物は世界各地の暖温帯広葉樹林で優占種となっているものが多い。その果実(どんぐり)は、人間や動物にとっても、食糧として重要な意味を持っている。また、ブナ科を構成しているメンバーは樹木となる種ばかり、その材は多くの用途があり、古代から人間生活とのかかわりも大きかったと思われる。

樹木という植物界にとって古いと考えられる形質を基本的に維持しながら、現在地球上にこれだけの生態学的地位を保っているブナ科植物のナゾを探ってみたいと思う。

団栗を科学する

ブナ科の植物が、今日地球上でこれだけの生態的地位を占めている秘密は、その果実の中にありそうだ。ここでは先ず、そのどんぐりを詮議してみよう。

どんぐりは普通、植物学では殻斗と呼ばれる皿状または椀形のへたの上に載っている。この皿は総苞に当たるもので、アザミやタンポポなどのそれと相同の器官である。アザミやタンポポでは中に沢山の果実が入っているが、どんぐりでは、その果実が一つだけになっているにすぎない。その基本的な構造はクリの実を参照していただくとよく理解できる。外を包んでいるイガの生えた皮が総苞で、イガ(針)の1本1本が総苞片に当たる。これが皿状に変形しているのであ

る。その移り行きの姿はクヌギやカシワ、シイなどを見ると中間的な姿が伺える。即ちクリでは、3個の果実がイガを持った総苞に包まれていたのが、クヌギ、カシワ、アベマキなどどんぐりとなった種では果実が一つになって背が露出し、総苞は皿状に下部のだけが残り、イガの針は短縮して鱗片状になっている。さらにミズナラ、コナラになると、総苞の鱗片は小さい鱗片状に退化している。そして不思議なことに、こちらの系列で日本に見られるものは全部落葉樹で、クヌギ、アベマキ、カシワなどでは、花が咲いてからどんぐりが熟すまで2年かかっていたのが、コナラやミズナラになると、わずか1年でその年の秋にはもうどんぐりが熟すように成熟期間の短縮が起きている。

一方、殻斗の表面が鱗ではなく、横輪状の文様になっているカシの仲間では、果実全体を総苞が包んでいるシイの仲間から、皿の様な殻斗が発達した姿が伺える。そしてウラジロガシ、ツクバネガシ、アカガシなどは花が咲いてからどんぐりが熟するのに2年かかるが、アラカシ、シラカシ、イチイガシになると1年でどんぐりが熟してしまう同じ進化が起きている。

どんぐりの皮

次にどんぐりの本体を見よう。これは種だろうか、果実だろうか？ めしべの子房が発達したものが果実

であり、胚珠が発達したものが種子であるという植物形態学の基本を思い出してみよう。カシヤナラの類の花は雌雄同株であるが、花序は雄花と雌花とが別々の花序につく。雌花は新しい短縮した枝につき、1個の総苞の中に1つずつ雌花が入っている。小さくて見にくい、柱頭とそれを支える花柱だけが2または3本だけ、総苞の中心部から首を出していて、中には薄い花被に包まれたためしが1個だけ入っている。おしべは退化して無い。したがってドングリの一番外にある堅い皮は子房壁と花被とが合着したものということになる。そして渋皮から中が種子である。柱頭が2-3本あるということは、子房が2-3心皮からできていたということを示している。

子葉に養分をつめ込んだ無胚乳種子

被子植物の多くは重複受精の結果、3核が合体(2個の核と1個の精核)してできた3n組織に相当する胚乳が、次の世代を荷なう種子の栄養貯蔵器官となっている。ところがドングリはと見ると、胚乳が無く、中は肥厚した2枚の子葉が栄養分をいっぱい貯め込んでつまっている。すなわちマメと同じ仕組みである。栄養の貯蔵組織が胚乳ではなく子葉にあるということは体制上大変な進化と考えられる。

それは分かりやすく言うと、3nの組織にまで高められた強化食に当たる弁当を、親がもう一度消化して吸収の良い乳児食にまでして、種子が発芽して目を覚ましたらすぐに、吸収できる状態にして、子供の体の一部である子葉につめ込んだ状態になっているのである。多くの胚乳に栄養分を貯蔵した種子では、

休眠性は良いが、種子が発芽したら先ず根を出し、子供が自分の力で地中から水分を吸収し、胚乳に貯えて、親が準備してくれた弁当を自分でぼつぼつと消化吸収しなければならぬのである。それに較べると次代を荷なう子供の体の一部である子葉に養分をつめ込まれた状態にある無胚乳種子を持った植物は、出発点で大いに先がけして、胚乳を持った種子から発芽発出したものよりも優位に立つことができるのである。

ブナ科植物の実状

そこでドングリの発芽成長の実状がどうなっているかを観察してみよう。殻斗から離れて落下したドングリは、うまく林床の落葉の中にもぐれた幸運なものだけが、その湿気を吸収して即発芽し、太い大きい根をドングリの先から伸ばして地中に根を張りつつ、子葉から養分を吸収して上に茎を伸ばし、落葉の層の上あたりの芽を作って、春の暖くなるのを待ちつつ、根部を充実させて準備を整え、春の到来と共に急成長を始めるのである。春、暖かくなってから、やおら発芽して一切の成長の準備から始める多くの種子に比べると、その初期成長の大きさと有利さは抜群である。その代わり、うまく落葉の下にもぐれなかった多くのドングリは、死んでしまって動物達のえさとなるのである。

(終わり)

絶滅の危惧に瀕しているのは……

森林再生支援センター専門委員
小串重治

1. はじめに

『レッドデータブック』。絶滅のおそれのある動植物

の現状をとりまとめた資料です。ここ数年、テレビや新聞で『レッドデータブック』掲載種のが……とい

った記事をよく耳にするようになったと思います。

特に、秋の七草の1つであるフジバカマやキキョウ、童謡で誰もが親しんだメダカ等が、環境省発行の全国版『レッドデータブック』に絶滅危惧種として掲載されたことが記事として大きく取りあげられたことは記憶に新しい方も多いのではないのでしょうか。

『レッドデータブック』は希少な動植物のリストと考えるのが一般的ですが、見方を変えると地域の緑の荒廃状況を警告するとともに、保全・復元・創出の大切さを示すメッセージであると言っても過言ではないでしょう。

2. 『レッドデータブック』掲載種と私

私は平成2年4月より、環境調査・計画検討を行う、いわゆる環境調査会社に勤務し、現在、13年目を迎える技術スタッフです。

これまで、数回『レッドデータブック』掲載種の保全計画検討に係わる業務に携わってきました。当然ながら、手探り状態で取り組んできたことが多いわけですが、実は、ずっと『引っかかるもの』がありました。

3. 事例：雑木林のミヤコアオイと

ギフチョウの保全計画

・経過

S県の雑木林内で砂防ダム、流路工を整備するにあたって事前に環境調査を行った結果、砂防ダム堰整備予定箇所及びその周辺でS県のレッドデータブック掲載種であるミヤコアオイとギフチョウが確認されました。

S県では「砂防ダム堰整備計画の全面的な見直しは難しい」と判断、ミヤコアオイとギフチョウの移植適地をS県の管理地内の非改変区域から探し、ミヤコアオイとギフチョウの移植をすることとしました。

私は、上記業務において、移植作業前の事前調査、移植適地選定の期間の2ケ年、移植作業後ほぼ2ケ月間隔でモニタリング調査を行った2ケ年、合計4ケ年近く、現場に通いました。

・移植後のモニタリング調査の結果と評価

移植後、2ケ年間のモニタリング調査でミヤコアオイの定着(約80%)が達成でき、ギフチョウの産卵・飛翔も確認されました。「ミヤコアオイとギフチョウの移植は成功。」という評価をS県担当から頂き、形式的には一件落着ということになりました。

・『引っかかるもの』

ミヤコアオイもギフチョウもある程度手入れされた林床の明るい雑木林があってはじめて生息が維持されることが知られています。つまり、移植作業の有無、砂防事業の展開の有無に係わらず、長期的にみて雑木林の適切な管理があってはじめて、ミヤコアオイもギフチョウも生息が維持できることを考えると、実は砂防事業の実施と関係なく、保全対策が実施されるべきではないのか。そして、『引っかかるもの』として、「レッドデータブック掲載種を含めた地域の緑を守るのに必要なものは何なのか、誰が守るべきなのか」を考えてしまいます。

4. レッドデータブック掲載種を含めた地域の緑づくり

・資源利活用社会システム(生業)を通じて

『レッドデータブック掲載種を含めた地域の緑』は過去において、どのように維持されてきたのでしょうか？

解答は明瞭です。地域、時代によって手法は異なりますが、地域の環境条件に合致した資源利活用社会システム(生業)を通じて、草木、落葉等の植物資源の適度な利活用、インパクトを受けて維持されてきたと考えられます。

前述の事例である、ミヤコアオイとギフチョウについても、里山利用(薪取り、落葉利用)という生業のインパクトを通じて生息環境が近年まで維持されていたと考えられます。

この地域の環境条件に合致した資源利活用社会システム(生業)は1960年代以降の燃料革命後、急速に機能しなくなったことが知られています。この現象がまわりまわって、『レッドデータブック掲載種を含めた地域の緑』を荒廃させている主要原因となっていると

言えます。

では、『レッドデータブック掲載種を含めた地域の緑』を拡幅するためにはどのようにすればよいのか。当然のアプローチとして、全面的に現在の社会システムを否定し、過去の資源利活用社会システム(生業)をとり戻さすという手法が考えられますが、この手法は現実性が低いと言わざるを得ません。「ライフスタイルを 40 年前に戻せ」と言って協力して頂ける方はいるでしょうか。

実現性の高い手法としては、地域の環境条件に合致した資源利活用社会システム(生業)が地域の緑に与えていた 40 年前のインパクトと同質な、新しい『緑づくり』のインパクトを何らかの形で施すという手法が考えられます。

・『地域の緑づくり』= 『緑づくり』+ 『地域づくり』

新しい『緑づくり』としてのインパクトとはいかなるものか。「言うは易し、されど……」です。「地域ごと、立地環境ごと、また、保全活動を行う活動主体ごとに『緑づくり』は十人十色であろう。」とか、「現地での詳細な対策検討・評価が不可欠であろう。」と思いますが、実は、具体的にどういった『緑づくり』が適切なのかについて、私自身、解答を持っていません。

この解答探しに関して、ケース・ケース、試行錯誤の中で、自然に謙虚な立場で、誠実な自然との向き合いを通じて新しい『緑づくり』のあり方を考えていくことが大切であると考えています。

その一方で、技術論としての『緑づくり』に勝るとも劣らない重要な事項として、『地域づくり』があげられると考えています。具体的には、『緑づくり』を推進する担い手の育成、支援する社会システムの整備です。

実践する担い手がいなければ、どんなすばらしい『緑づくり』に関する技術論が提案されても、『絵に描いた餅』に過ぎません。

つまり、『レッドデータブック掲載種を含めた地域の緑』の保全・復元・創出には、『緑づくり』の技術論と緑づくりを実践する『地域づくり』の双方のアプローチ

が不可欠であると思います。

前述した私自身が『引っかかるもの』は、後者の部分、緑づくりを実践する『地域づくり』へのアプローチが欠如していたことに起因していると考えられます。

5. 絶滅の危惧に瀕しているもの……

「『レッドデータブック』は地域の緑の荒廃状況を警告するとともに、保全・復元・創出の大切さを示すメッセージである」と前述致しましたが、この評価も実は表面的なものではないのかと最近考える様になりました。

本質的には、『レッドデータブック掲載種を含めた地域の緑』の問題は動植物の問題ではなく、人間側の問題、つまり、地域の緑の楽しみ方、利活用の手法を熟知している、『40 年前、普通にいた日本人』こそが絶滅の危惧に瀕し、その結果として多くの問題が顕在化しているのではないのでしょうか。

「樹種ごとに木質の堅さ等が異なることを踏まえた上で、樹種ごと巧みに使用目的を見いだす」、「季節にふさわしい花、鳥、虫、風、月をひいて時候の挨拶とする」、「花見、蛭狩り、月見、紅葉狩り等を年中行事として楽しむ」、「動植物のささいな活動の変化を見逃さず自然災害に備える」、「植物資源の再生利用において、節度をもって利用できる」等、『40 年前、普通にいた日本人』の知恵は、37 歳になる私の世代、そして、私より若い世代は持ち合わせていない。それ故、地域の緑についての関心も低い……のではないのでしょうか。

そういった意味では、『40 年前、普通にいた日本人』の知恵を十分身につけている方は、絶滅危惧種(人間)であり、私、そして私より若い世代の多くのものには、紛れもなく先生なのです。

6. 絶滅危惧種(人間)への進化の過程で……

「植物生態学が専門です」と自己紹介してしまう私自身、『40 年前、普通にいた日本人』の知恵を十分身につけているとはとても言える状況ではありません。

それ故、学識者の先生方からはもちろんのこと、先

日の男山での里山調査の活動中等、NPO 活動の中でも学ぶことが多いこと、日常茶飯事です。

振り返ってみると、森林再生支援センターの各種事業に参加・協力されている多くの方々は、『40 年前、普通にいた日本人』の知恵を十分身につけている『絶滅危惧種(人間)』、あるいは、これから身につけようとする『絶滅危惧種(人間)』予備群であるように思います。

当然ながら、私自身、『絶滅危惧種(人間)』へと進化していきたいと思っています。そして、『絶滅危惧種(人間)』の方々とともに汗をかく、多くを学ぶ過程の中で、現時点で私自身、解答を持ち合わせていない、新しい『緑づくり』のあり方、『地域づくり』あり方についてのヒントを探ることができるはず……と考える今日、この頃です。(終わり)

なぜ森林ボランティアをするのか？(後編)

森林再生支援センター 専門委員
下村 泰史(京都造形芸術大学)

・里山系団体にみる動機形成のありかた

多様な広がりを持つ森林ボランティアですが、大雑把には次の二つに分けられると思います。一つは「林業支援系森林ボランティア」、もう一つは「里山系森林ボランティア」です。前者はどちらかという、スギ、ヒノキに代表される人工林に注目し、森林と、長期斜陽傾向にある林業をなんとかしたい、と考えているグループです。後者は、燃料革命以降管理放棄され、遷移が進行しつつあり、本来の自然が失われつつある里山の管理を行っていかうと考えているグループです。

「里山系」の森林ボランティア活動においては、しばしば次のような文脈で活動の意義づけと勧誘が行われるようです。

燃料革命以降の放置による二次林環境の危機
市民による管理の必要性の訴求

レクリエーションを兼ねた楽しい活動への勧誘

は、社会レベルでの問題の把握であり、マクロレベルに属し、は個人の動機形成のレベルの問題であり、ミクロレベルに属するものといってよいでしょう。

は市民の動員と組織化に関連する問題であり、メゾレベルにほぼ相当すると思われます。

ここで注意すべきであると思われる点が二つあると思われる。一つは、マクロレベルの意義である「生態学による問題把握・目標設定」とミクロレベルの動機である「楽しさ」のギャップの問題。もう一つは、現状の問題と目指すべき状態が、ほぼ自然科学の観点からのみ語られ、里山を形成してきた地域社会の問題がほぼ省略されている点です。

第一の点については、意識的なボランティア団体においては、この二層を結びつける努力が常に行われているようです。

毎年開催されている「日本雑木林会議」などの集まりでは、活動や運営の問題の他に、地域の自然環境についてのエクスカージョンや分科会が設けられるのが常です。そこでは、自然の質を保つためになにをすればよいかという問題が、楽しいなかにも常に意識されるようになっていきます。

今回の調査においても興味深いデータが得られています。ワークショップに先駆けて、アンケート調査とインタビューを行ったのですが、里山系の団体においては、アンケート調査では「自然度」「生物多様性」といった客観的な自然の質を語る言葉を、「屋外活動そのものの楽しさ」「人間関係等グループ作業の楽しさ」といった要素より上位に据える回答を、対面インタビューにおいては活動における「自己実現」「楽しさ」の大切さを特に強調した回答を得ました。これは、フェイス・トゥ・フェイスで行ったインタビューでは、個人的動機に関係する部分が、郵送によるアンケート(しかもこの時点では面識なし)では、より外向けの公式的な部分が強調される結果になったものと思われる。

これらの2種類の回答の存在は、一つのグループの中で、「生態学的なもの」「楽しみ」が同時に強く意味づけられていることを示していると思われる。ここには個人的な「楽しみ」から出発して、よりよい環境についての「生態学的な気付き」があり、そこでより広く社会的に共有されやすいであろう「意義」が認識され、

それがまたより深い「楽しみ」に向かっていく、というループがあるのでしょうか。問題は、このループだけでよいのか、ということです。もう少し具体的にいうと、「意義」は「生態学的」な範疇にとどまるのか、また個人的動機「楽しみ」は、個人が関わっていくキーとなる、かけがえのない大切なものですが、その中身は十分な膨らみをもっているのか、そしてこのループが「楽しみ」をより豊かにしていくことができるのか、という問題です（これは第二層、メゾレベルに属する問題だと思われまます）。第二の点はこれに関連します。

第二の点は、里山保全の議論が、地域社会との関係を置き去りにしている部分があるのではないかと、ということです。

「市民参加による里山管理」に大きな影響を与え続けてきた重松は、『里山の自然を守る』（築地書館）のなかで、里山が大切な理由として、第一にすでにそこに豊かな緑量の「森」があるということ、第二にその地域の気候条件や土壌条件に適応して成立したものであるため、一定の抵抗性をもっていること、第三に里山は多種類の植物で構成されており（略）多層社会（生態系）を形成していること、第四に環境保全機能、第五に里山の生産機能、第六にレクリエーションや自然回帰の場、あるいは自然観察や環境教育の場、といったものを挙げています。これらはどれも、自然科学の俯瞰的な視線によって捉えられた一般的なものであり、その地域におけるその森林の価値とか人間生活との関係というものはきれいに捨象されています。

実際、里山系森林ボランティアが集結するシンポジウム等においても、地域との関係づくりがテーマとなることは少ないようです。2001年に神戸で開催された「日本雑木林会議」においては、いかに里山の利用率を高めるかということが大きなテーマとなっていたと思いますが、隣席した参加者より「街の側からしか山を見てないんやな」という呟きが聴かれました。

現在、森林ボランティアが活動しているフィールドには、公園や公有林等、公的な担保がある森林が多く、危機的な状況にある民有林には森林ボランティアの手があまり入っていないのが現状です（森林ボランティアと地域のミスマッチ問題）。これについて、森林所有者側のボランティアに対する信頼度が低いことが指摘されています。信頼度の低さについては、その知識や技術水準についての問題もあり、そこで指導者養成の問題がクローズアップされてくるのですが、それ以前に双方の意識のギャップが存在しているように思われます。森林ボランティアを動かしているものの中から、地域社会や風土といったものが捨象されてしまっているならば、それは必然であるといえるでしょう。

今回の事前アンケート調査からは、団体にもよりますが、地域との交流が比較的希薄なようすが伺われ

ます（事前アンケート調査結果のページを参照）。また、本ワークショップの結果を見ても、市民活動からの声、街からの声として「私は山に自由に入れるシステムづくりを考えてほしいです」、「自由に入れる山がほしい」といった意見が出ているのに対し、山からの声として「私は林内には許可なく入ってはいいただきません」、「私は、里山に都市住民の出入りを認める地主に対して、ゴミの放置や無やみな採取等さまざまなリスクを軽減・補償する制度（協定等も含む）をつくってほしい」といった意見が出ているなど、都市側と山側の意識のギャップを見ることができます。ここには他のボランティアには見られない、森林ボランティア固有の問題が存在していると思うのです。

・森林ボランティアは何を支援するのか？

～人に向かう活動へのシフト

鳥越は「環境ボランティア・NPOの社会学」の中で、環境ボランティアについて、「環境保全を目的として、善意から自発的な活動をおこなう外部からの支援者」というゆるやかな定義を与えています。「善意から自発的な活動をおこなう外部から」という点は、森林ボランティアにもほぼそのままあてはまるものと言えます。では、森林ボランティアは一体誰を支援しているのでしょうか。

上で取り上げた里山系森林ボランティアの「社会的意義（べき論）」には、支援すべき他者というものが全く想定されていないのです。ボランティアの労力は自然の質を高めることに向けて提供されますが、現在の動機形成のループのなかでは、その成果を認識するには「なんとなく良くなったような気がする」という風に納得するか、生態学的な調査法を用いて客観的に測定するかしありません。

福祉系や災害救援系をはじめとする一般的なボランティア活動では、ある不利な状況に置かれている人への人間的なシンパシー（共感）が、個々のボランティアの基本的な動機となっていることを、多くのレポートが教えてくれます。これはさまざまな環境系の活動においても変わりありませんが、里山系森林ボランティアにおいては、こうした部分が比較的少ないように思われるのです。

里山系森林ボランティアでは、多くの場合その支援対象は人間ではなく自然そのものであることが多いので、支援対象と喜びや悲しみといった感情を共有する機会が、他のボランティア活動にくらべ相対的に少ないとは言えるでしょう。その支援対象の笑顔なり、回復していく様子なりといったものを見て、それが動機にフィードバックしていくという回路が、基本的に閉ざされているのです。これが、個々人の動機形成の脆弱性に直接結びついていく場合もあるかもしれません。この点において、森林ボランティアはかなり特殊な活動であるともいえるような気がしています。

『水と人の環境史・琵琶湖報告書』のなかで鳥越はこう言っています。

「私どものいう環境史には明確な立場がある。それは当該社会に実際に生活する居住者の立場である。いわゆる第三者の立場(俗に客観的立場と言われている)には立たない。その理由の一つは環境問題には純粋に第三者の立場などあり得ないと考えているからだ。」

「私たちの理解では、地域環境は主としてそこに住む人たちの「日常的な知」によって支えられている。この「日常的な知」とは「過去の知の累積」の結果のことである。また日常的な知は科学的な知に対置される関係にある。目下、環境保全を支える知は日常的な知から科学的な知(その代表例は近代技術)に、その主役が変わりはじめている。科学的な知は“正しく”(“新しく”というべきだろう)、日常的な知は古い、という世間の“一般常識”があるため、この変化はかなり急速におこなわれている。」

ここでは、その地域の環境とともにあった人々こそが、その環境問題の主人公である、ということが明確に表現されています。そしてこの観点に立つならば、その環境が危機にあるとき、外部からの支援者はその人たちの「日常的な知」を尊重し、それに学びながら、その人たちを支援するというのが、ありべきボランティアの姿ということになるのでしょうか。これこそが、現在の森林ボランティア(特に里山系)において最も求められている視点なのではないでしょうか。

こうした点を踏まえると、森林ボランティア活動が、より意義深いものとなっていくためには、活動の「意義」を、生態学的側面に加え、その地域の人々に向かうものの中に、「楽しみ」を、自然の中で体を動かす爽快感に加え、地域の人々とのさまざまな「わかちあい」の中に見出していくことが求められてくるでしょう。そのためには、それぞれの活動地域における「共感的な場」づくりが必要となってくるはずです。

・「共感的な場」づくりへの種子

このような、人間的な共感の場をつくっていくに当たってのシードになるものは、既に森林ボランティア活動のなかに存在していると思います。

一つは、「山仕事サークル・杉良太郎(すぎよしたろう)」(以下「杉良太郎」という)と「雲ヶ畑」集落が築いてきたような信頼関係です。ここでは、若者のグループが真摯に地域の林業家から学んでいくプロセス自体が、地域を元気づけることにつながっていたといえます(<http://www.crrn.net/workshop/sugiryo.htm>)。もう一つは、「京都森林作業体験セミナー」のような山側の動きです(<http://www.crrn.net/workshop/semina.htm>)。他の森林ボランティアが、「都市から山村へ」というものなのに対し、この団体は山と林業技術を所有する側が、「都市の人に森林・林業を知って

もらいたい」という動機に基づいてボランティア的に行っているもので、山側からのアプローチとして注目すべき存在だと思います。また、本ワークショップにおいても、「山からの声」として「私は林業経営では生活ができなくなりました。したがって山の手入れができなくなっています。このままでは山が荒れてしまい皆さんにおいしい水が提供できません。山の手入れに協力して欲しい。」という意見がでていたように、山の側においてもこうした連携へ向けての芽が生じつつあるように思われます。

もう一つは、森林ボランティア内のジャンルの越境です。既に見てきたように、里山系の森林ボランティアの中には、地域へ関わっていく意志というのはまだまだあまり強く根づいていないところがあるのに対し、人工林系の森林ボランティアは、本質的に地域に関わっていくことを志向していることです。先に挙げた「杉良太郎」を始め、人工林優先を掲げる「森づくり政策」市民研究会のアピール文

(<http://www.jca.apc.org/morizukuri/>)にも、こうした傾向ははっきり読みとることができます。こうした人工林系と里山系の境界が、今攪拌されつつあるように思います。事前アンケート調査を参照しても、純然たる二次林だけをフィールドとしているところはむしろ少数派です。また、「フォレスターうじ」のインタビュー(<http://www.crrn.net/workshop/uji.htm>)、「里山倶楽部」(<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/bamker/>)等を見ても、里山での活動を通じ、だんだん人工林での林業に関心が向かっていく傾向が見て取れます。こうしたジャンルの越境が、「杉良太郎」の項で見たような、地域との信頼関係につながっていく、一つのきっかけになりうるのではないかと思います。

・これからに向けて

このような共感の種子を豊かに育むには、中間的な組織が積極的に「立場を越えて森林の明日を考える」場の設定を行っていく必要があるでしょう。今後このような交流機会を設定するとすれば、(1)立場を越えて集える場づくり、(2)人ごととしての一般論ではなく、「私は～」が素直に言える場づくり、(3)地域における行動・活動を通じて相互理解に誘う場づくり、といったことに留意すべきだと思います。

(1)はこの場合決定的に重要な事項です。実際にはだれもがなんらかの社会集団に属しており、ついついその立場から発想・発言してしまいがちです。そのことを十分に意識し、それを越えることを考えないと、村は村の、行政は行政のといったそれぞれの立場の正論を言い合うだけに終始してしまいかねません。それぞれの殻を越えて率直に交流するには、工夫と努力が必要となります。この点においては、全国水環境交流会の「3つの原則7つのルール」が参考になるでしょう。

「3つの原則」とは、自由な発言、徹底した論議、合意の形成、です。「7つのルール」とは、参加者は自由な一市民として発言する、参加者個人の見解は所属団体の公式見解としない、特定個人・団体のつるしあげは行わない、議論はフェアプレイの精神で行う、議論を進めるに当たっては、実証的なデータを尊重する、問題の所在を明確にした上で、合意をめざす、現在係争中の問題は、客観的な立場で事例として扱う、というものです。～等は、森林を巡る交流場面でも、特に示唆的であるといえるでしょう。

(2)は、(1)の や などとも重複しますが、一人一人が借り物ではない、自分自身の言葉で語り出さなくてはならないということです。まとめていく段階では客観的視点も必要ですが、その前に当事者同士の実感を共有する場がなくてはなりません。今回のワークショップで、あらかじめ「私は～」という語りだして記入してもらった用紙を用意したのは、そのような意図によるものです。今回は十分な交流機会を設けることができませんでしたが、このような配慮は、実際に語り合う場面でより重要なものとなってくるでしょう。

(3)山の問題はその地域の問題と一体であることを考えると、山とその地域のあり方を現地で実感的に体験していくこと、そうした体験を立場を越えて共有していくことが重要となってきます。ですから、どちらかといえば山側に、交流の舞台が求められているといえるでしょう。今回のワークショップは、2回とも都心の会議室で開催したが、今後はより具体的なフィールドを設定し、そこでの体験を重ねていく必要があると思います。

今回の「きょうとの森ワークショップ」は、行政とNPOの協働によってそうした「立場を越えて森林の明日を考える」場を創り出そうとする試みでした。全体を通して見たとき、上記の点を考えると、街側から出発したことや運営上のさまざまな問題から、必ずしも「共感的な場」をつくることまでは到れなかったかもしれません。しかし、今後も反省を踏まえてこのような場が継続して設けられていくことが、きょうとの森に実りをもたらすに違いないと確信しています。

そうしたなかで、セクター間の「パートナーシップ」を越えた、人間同士の「フレンドシップ」が生まれ、より深い理解と共感に基づいた活動が行われるようになっていくことを望んでいます。(終わり)

センター事務局よりお知らせ

～最近の森林再生支援センターの活動～

第1回「大台ヶ原自然再生検討会」

平成14年11月15日(金)

第1回「森林再生手法検討部会」

平成14年12月4日(水)

「大台ヶ原自然再生検討会」が、大台ヶ原において、生態系の観点から自然再生のあり方について検討し、「大台ヶ原自然再生推進計画」の策定に資することを目的に設置されました。森林再生支援センター 宮前洋一専門委員が検討委員に選任されました。また、「大台ヶ原自然再生検討会」のもと、主に大台ヶ原地域における森林再生手法に関する事項について検討する「森林再生手法検討部会」も設置されました。森林再生手法検討部会には、森林再生支援センター 高田研一、野間直彦各専門委員が委員に選任されました。

京都古事の森「晩秋の自然散策と森を語る会」

平成14年12月8日(日)

小雨の降る中、京都左京区貴船地区の貴船神社、古事の森周辺の自然散策と「森を語る会」の講演が行われました。約30名の参加があり、森林再生支援センターからは高田、松井淳各専門委員が講師として、松本茂、武田純各専門委員も参加されました。

尾瀬至仏山保全基本計画策定業務

尾瀬至仏山緊急保全対策検討会に関わる技術委員会のコーディネートを森林再生支援センターが行うことになりました。森林再生支援センターからは高田、湯本貴和、濱野周泰、齋藤与司二各専門委員がメンバーに加わります。

会員名簿訂正のお願い

前号のニューズレター(No.7)と一緒にお送りいたしました会員名簿に誤りがございましたので、訂正をお願いいたします。

濱野周泰さんの専門分野

「樹木医」(誤) 「造園樹木学」(正)

こちらの記載ミスです。申し訳ございませんでした。今後、このようなことのないよう気を付けます。

センター活動へのお問い合わせ、ご意見・ご提案、センター入会申し込みは下記まで

特定非営利活動法人 森林再生支援センター 事務局

〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5 TEL/FAX:075-211-4145

E-mail: info@crn.net URL: http://www.crn.net